アルバ島日食観測記

大越　治

◆ 今年こそ！

昨年のモンゴルで薄ぼんやりしたコロナしか見ることができなかった私は、今回の日食でぜひ弔い合戦をしたいと考えていた。しかし、残念なことに公私ともに極めて多忙となり、いつものように自分で遠征計画を立てることが全くできなくなった。そこで盟友石井氏の計画に乗ることにしたのだが、それも飛行機便の都合で参加取り止め。そして一般募集ツアーの中で石井氏の計画に最も近い(最短の)、日通新宿支店の「アルバ島Ａコース」で出かけることになった。

このツアーは島南部のレストランを借り切り、その中庭で強い風を避けながら観測するようになっていた。実際、日食の前々日(24 日)は台風のような強風が吹き荒れていたそうである。幸運にも前日(25 日)および日食当日(26 日)は思いのほか穏やかで、風よけとしてのレストランの塀は必要がないほどであった。

◆ 不安な始まり

島の北部にある宿泊ホテルを出発するバスは、60 名近い参加者を乗せ、約１時間かかって 10 時には観測地であるレストランヴィア・マルタに到着した。前日午後と違い、朝方は積雲系の雲が東から西に流れる不安な天気であった。観測地到着の頃には空は晴れ渡っており、さっそくレストラン外の西側で機材を組み立てることにした。しかし 11 時半過ぎ、ピント合わせの体制ができた時には雲のため太陽が見えない状態になっていた。

レストランから「昼食の準備ができた」とのアナウンスがあり、人々が次々にランチボックスを受け取りに行く。私は、完全に機材の準備ができてから、と考え作業を続けていたが、次第に雲が厚みを増し、誰かの「海の方でスコールが降っている」という声も聞こえてきた。見ると確かに、低く黒い雲から海面に向かって煙ったようなスコールである。「いやー、あれはこっちに来るよ」という声。冗談じゃない、いつもは機材一式がすっぽり入る厚手のビニール袋を持ってくるのだが、今回はうっかり忘れてきたのだ。さあ、本当に降ってきたらどうしよう、と考えているうちに、「来た来た！」という声。本当にぽつりぽつりと雨が落ちて来るではないか。しかたなく日除けに持ってきたシートを機材にかぶせることにした。幸いにも大した雨ではない。12 時少し前に雨対策を終了し、昼食を受け取りにレストランに入った。湿度が上がったせいか中は蒸し暑い。

食事が済んで外に出ると、もう雨はほとんど止んでいたが雲はかなりの量である。『これはもうダメか』という気持ちと、『いや、絶対に大丈夫だ！』という気持ちがぶつかり合う。晴れることを信じて予定通りに淡々と準備を進める。

幸いなことに雲は次第に薄くなり、12 時 38 分 51 秒の第１接触は周囲に多少の雲が残っていたが無事にビデオ撮影することができた。その後も雲は増えたり減ったりを繰り返していたが、

ついに 13 時 20 分ごろから空は完全に晴れ渡り、絶好の日食日よりである快晴状態になった。

◆ 最高の３分半

次第に周囲が日食独特の薄暗さに変わり、気温も３度以上も低下した。東の空に金星が見えだし、次第に気分が盛り上がってくる。繰り返し望遠鏡のピントを確認する。事前に配付された資料に磁針の偏角に記述があり、当日、その訂正のアナウンスがあった。それに基づいて赤道儀を設置したはずなのだが、どうも視野内の太陽が次第にずれてくる。ここで下手に修正してかえって事態が悪化するといけないと思い、そのまま観測態勢に入る。14 時 06 分、指令テープをスタート。かなり細くなった太陽を目を細めて見上げた時、何か白っぽいものが太陽の周囲に見えたような気がした。一瞬、『絹雲か！』と思ったが、実際はまつげに乱反射した光であった。

周囲がぐんぐん暗くなる。小池田さんの「影が来た」との声（14 時 09 分 15 秒）に、西の空を見る。確かに真っ黒いが本影錐の境目がはっきりしない。下を見るとシャドーバンドがぐんぐん流れていくのが見えた。スクリーン、地面、レストランの壁、一面にシャドーバンドの縞模様だ。興奮がさらに高まる一方で、冷静な自分がいる。予報（指令テープ）と実際の現象のズレがどのくらいか、見極めなくてはならない。テープの自分の声が「５、４、３、２、１、第２接触！」『ほんのわずか早いか？　でもほとんどぴったりだ』と思った瞬間、思わずカメラのレリーズを押してしまった。予定外の１コマ、しかも２秒露出である。これでかえって落ち着いてしまった。

最初の 10 秒間は空を見上げる。濃紺の空にコロナが大きく羽を広げたように輝いていた。いつもの真珠色と少し感じが違う。もう少し暖かい感じの色である。東西に太陽半径の５倍程度（６R）まで伸びたコロナの形は、極めて極小型に近く見えた。そしてそのコロナの両側に、突然現れたかのように、左上（東）に水星、右下（西）に木星が輝いていた。金星と違い、太陽に近いために部分食中は見えなかったのである。水星は木星に負けないくらい明るい。奈良薬師寺の大日如来の両脇に、脇侍の日光菩薩と月光菩薩が立っている様子が思い浮かんできた。

指令テープのカウントが「スタート」になったら偏光の撮影開始だ。レリーズを押す時とシャッタースピードを変える時は手元を見ない。偏光フィルターを回転させる時だけ立ち上がってフードを回転させ、指標を合わせる。練習の時よりスムースにできるぞ！

ノーマル撮影に移ってから途中で１回、ファインダー内を確認した。なんと、コロナが中心からだいぶずれている。慌てて修正し、さらに撮影を続ける。テープの声が「食甚 30 秒前」を告げた。時間が大きくずれていないことを確認してあったので、周りのみんなにも知らせてやろうと思い、大きな声で復唱する。

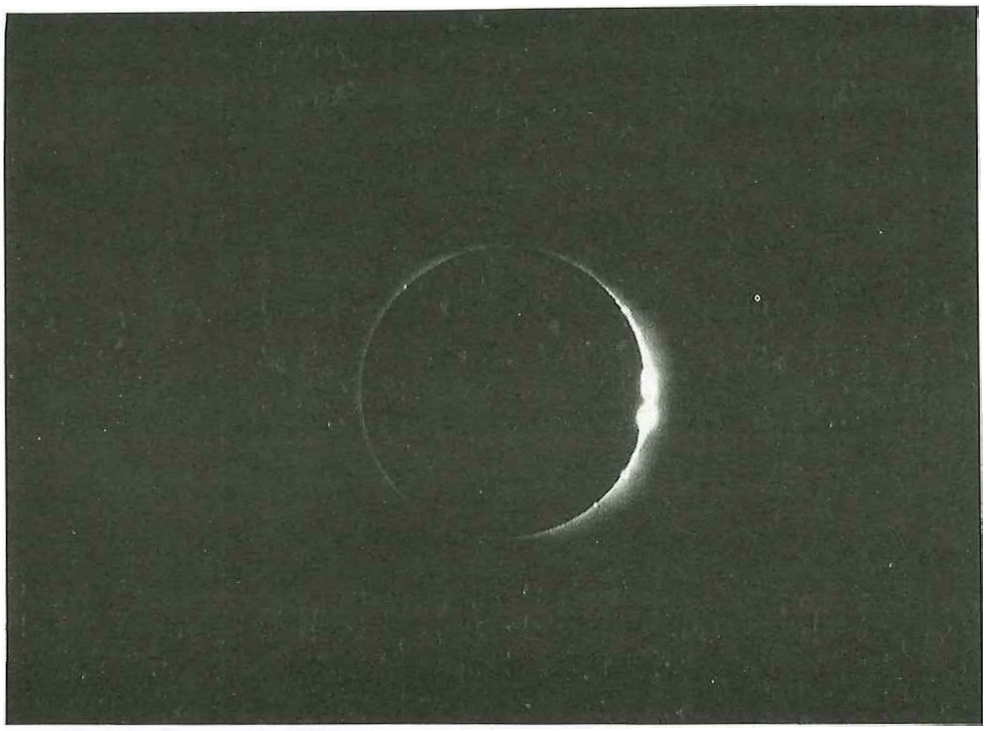
予定の枚数を取り終えたら、あとは双眼鏡で見るだけだ。妻の防震双眼鏡（Canon　10 × 30）を借りてきている。妻は今回都合でキャンセルしてしまったが、この双眼鏡を使えば妻と二人でコロナを見ているように思えるのだ。『防震双眼鏡なのに視野が揺れるな』と思ったら、何とスイッチを押していないことに気付き、慌ててボタンを押す。ピタリとゆれば止まり、ぞくぞくするような素晴らしい光景が広がった。コロナは決して暗いわけではないが、全体的に薄い（向こ

うが透けて見える）感じで、少し弱々しい感じだ。西側にあるストリーマーは比較的太めのものが２本目立っている。東側はそれより細目のものが３本目立つ。一番目を引くのは南南西から出て鋭く西に曲がっている小さいストリーマーである。ポーラープリュームは南北ともくっきりとコントラストがよく、実に美しい。ビデオの音声にコロナの様子をいろいろ録音するつもりだったが、ろくな事をしゃべれない自分が情けなくなる。

◆ シャドーバンド撮影に成功！

次第に西側のコロナが明るさを増してきた。第３接触が近い。30 秒前、20 秒前、10 秒前のコールも復唱して周囲に知らせる。西側のプロミネンスがルビーのように輝いている。そしてその下から鮮やかに赤い彩層が出てきた。そして二粒のダイアモンド。シャッターを３回切る。みるみる明るくなって皆既は終わった。去っていく本影錐ははっきり確認できなかった。

ほっと一息つき、下を見ると再びシャドーバンドの嵐だ。今まで経験したものと比べるとかなりコントラストがはっきりしている。見える時間が長いのにも驚いた。

第３接触後、一息つくとすぐにシャドーバンド撮影用ビデオを巻き戻し、再生してみた。やった！　鮮明に写っている。これでぐっと気が楽になった。

松岡さんが持ってきてくれたコロナビールを飲みながら、気温と照度の測定、そして測光用の部分食を写す。その後はおおむね良い天気が続き、第４接触も無事にビデオ撮影できた。第４接触まで観測を続ける人はほとんどなく、ツアーのみんながビールで乾杯している時も、私は必死で機材の片づけに奮闘していた。